

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



32

よろこびの知らせ
第32集

目 次

私も受けたこと	1
コリント第一 15:1-5	
生き返るたましい	10
詩篇 23:1-6	
わたしはあなたを忘れない	18
イザヤ 49:13-16	
最後の勝利	27
コリント第一 15:51-58	

ここに収められたメッセージは、2022年4~5月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

私も受けたこと コリント第一 15:1-5

15:1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。

15:2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音の**ことば**をしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。

15:3 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、

15:4 また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、

15:5 また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。

一、十字架の福音

さて、きょうの箇所、使徒パウロは「私は今、あなたがたに福音を知らせましょう」と言っています。「福音」は英語で “Gospel” です。“Gospel” は “good” と “spell” が合わさってできたもので、「良い言葉」となります。最近の英語の聖書では “Good News” と訳してあります。「グッド・ニュース」といっても、近所の店でセールをやっているとか、アルツハイマーに効く薬ができたとか、さまざまです。聖書の「グッド・ニュース」は、神が人間に与えてくださる最高の幸福についての「ニュース」ですので、それは、大文字の「G」と「N」を使って “Good News” と書きます。

古代では、王に世継ぎが生まれたとき、その誕生を知らせる言葉は「福音」と呼ばれました。イエスの誕生のとき、この言葉が使われています。ルカ 2:10-11 に「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです」とあります。ここで「知らせる」と訳されている言葉は、名詞の「福音」（εὐαγγέλιον）を動詞の形にしたもので、「福音を知らせる」（εὐαγγελίζομαι）という言葉です。原語では「福音」という言葉入っています。天使は、神がずっと以前から約束しておられ、信仰ある人々が待ち望んできた救い主が、今、お生まれになったと、羊飼いたちに「福音を知らせた」のです。

イエスの誕生が福音であるのは、その通りですが、きょうの箇所では、イエスの「死」も「福音」だと言われています。なぜでしょうか。それは、3節に「キリストは…私たちの罪のために死なれた」と書かれているように、イエス・キリストの死が、「私たちの罪のため」、つまり、私たちを罪から救うものだからです。

聖書では、「罪」と「死」は結びついたものとして書かれています。神が人間に与えられた最初の戒めは「善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」と言われました（創世記 2:17）。木の実を取って食べるくらいで「死ぬ」などというのは、厳しすぎると、多くの人は言いま

すが、これは、神が人に、神を愛して、その言葉を守ることを求められたのものでした。ところが、人は、神の言葉よりも、自分の判断を優先してしまったのです。その結果人類に死が入りました。新約聖書は、創世記からはじまる旧約聖書のすべての言葉を要約して、「罪から来る報酬は死です」（ローマ 6:23）と教えています。

しかし、アダムは罪を犯したとき、すぐにその場で息絶えませんでした。もしそうなら、全人類はとうの昔に絶えていたでしょう。神は罪に対して即座に死を与えるのではなく、人それぞれに寿命を与え、地上に生きている間に、罪から離れて、死後のさばきを免れる機会を作ってくださいました。神は「罪を犯した者は、その者が死ぬ」（エゼキエル 18:4）と言われましたが、同時に、こう言われました。「しかし、悪者でも、自分の犯したすべての罪から立ち返り、わたしのすべてのおきてを守り、公義と正義を行なうなら、彼は必ず生きて、死ぬことはない。彼が犯したすべてのそむきの罪は覚えられることはなく、彼が行なった正しいことのために、彼は生きる。わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。——神である主の御告げ。——彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。」（エゼキエル 18:21-23）これは、人が罪と、その結果である死から救われるよう願っておられる神のお心を教えています。旧約の時代、罪からの救いは部分的にしか与えられていませんでしたが、新約の時代には、完全な救いの道が開かれたのです。

それが、イエス・キリストの十字架です。イエスは、

罪の報酬である死を、私たちに代わって引き受けることによって、私たちが罪と罪の結果である死から救っていただきました。人は愛の神に背いてみずからを罪ある者としたのですが、神は、そのような人間を愛し続けて、ご自分の御子を罪人の身代わりに死なせてくださったのです。「わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ」（エゼキエル 33:11）と言われた神は、罪びとが悔改めて生きることができる道を、ご自分の御子の死によって切り開いてくださったのです。ですから、イエス・キリストが死なれたことは「福音」、グッド・ニュースなのです。

多くの人が、「人生なんて、自分が満足するように生きればそれでいいのだ」と思い込んで、大切な人生をあてもなく過ごしています。自己中心的な生き方を押し通し、その結果に苦しんでいます。そのように自分の罪のために自分を苦しめている私たちを、神はあわれんでくださり、そのひとり子イエスをお与えになったほどに愛して、イエスの死によって罪を赦し、新しい人生を歩むことができるようにしてくださったのです。「キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれた。」これが「福音」、「十字架の福音」です。

二、復活の福音

そして、聖書にある通り、イエスの死は、死で終わりませんでした。イエス・キリストはよみがえられました。もし、イエスが死んだままで復活されなかったら、

イエスの死が、私たちを救うものであることを保証するものを見つけることができません。また、イエスの十字架によって罪を赦され、罪のさばきから救われたとしても、毎日の生活の中で罪の誘惑をしりぞけ、悪に打ち勝つ力を得ることはできません。私たちには、罪を赦されるだけでなく、罪に打ち勝ってきよい心を持ち、正しい行いをする力が必要です。そして、それを与えるのが、イエスの復活なのです。

聖書にある通り、私たちは、「自分の罪過と罪との中に死んでいた者」でした。からだは生きていても、そのたましいは死んでいたのです。聖書は、私たちが罪の中に死んでいた状態をこう表現しています。「そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。」（エペソ 2:2）私はここを読むたびに、学生のころ聞いた説教を思い起こします。その説教はこういったものでした。「山から切り出された木は枝を切り落とされて丸太になります。それは森を流れる川に浮かべられ、いかだになって川下の製材所まで流れていきます。丸太は、お互いにぶつかりあいながら、川の流れに従って流されていきます。聖書に『この世の流れに従い』とあるのは、そのような状態です。命のない丸太は川の流れに流されるままですが、川に住む小さな魚は流れをさかのぼっていくことができます。ここに命あるものと、命のないものとの違いがあります。私たちはキリストの命をいただいてこそ、ほん

とうに自由に生きることができるのです。」

また、ある人の証しを思い起こします。その人はこう言っていました。「私は、若かったころ、青年なのに、生きる力を失って、まるで老人のようでした。自分のたましいは死んでしまって、生きている喜びを少しも感じることができませんでした。けれども、イエスさまを信じたとき、生きる希望を得ました。イエスさまによって生かされていると感じるようになりました。実際、私のたましいは生き返り、人生に喜びが戻ってきたのです。」

この人ばかりではありません。多くの人が、イエスを信じることによって、ほんとうに自由な人生へ、イエス・キリストの命に生かされる人生へと導かれてきました。エペソ 2:4-6 は、こう書いています。「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」イエスは、その死によって私たちの罪を引き受け、私たちを死から救ってくださっただけでなく、その復活によって、私たちを生かしてくださるのです。

ローマ 6:23 は「罪から来る報酬は死です」という厳粛な事実を教えています。もし、この箇所がここで終わっていたら、どこにも希望はありません。しかし、この箇所はこう続きます。「しかし、神の下さる賜物は、私た

ちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」これが「復活の福音」です。

三、私の福音

イエスの十字架と復活が私たちを救います。しかし、そのことを知らなかったら、救いはその人のものになりません。また、それをたんに、歴史の事実として認めるだけでは人は救われません。きょうの箇所には「キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと…」とあるように、十字架も復活も「聖書の示すとおりに」、「聖書に従って」なされたことです。パウロは聖書の学者として、十字架や復活について、聖書から多くのことを論じることができたでしょう。しかし、ここでは、そうした議論をしないで、「また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われた」（5節）と言っています。復活なされたイエスに出会った「ケパ」（ペテロ）や他の弟子たち、8-10節では、パウロ自身のことを語っています。「そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。」ペテロや他の使徒たちが迫害や投獄、また、死も恐れずにイエスの復活を宣べ伝えたこと、迫害者であったパウロ自身がキリストを宣べ伝える

者に変えられたこと、こうした体験、証しによって福音を語っているのです。

パウロはきょうの箇所、「私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって」と言いました。福音は変わらない真理です。歴史の事実です。しかし、それは「私も受けたこと」、つまり、福音によって変えられ、生かされた人生の証しを伴って伝えられるものなのです。

パウロは「私の福音」という言葉を3度使っています。ローマ2:16と16:25、そして、テモテ第二2:8です。「私の福音」には、「私が宣べ伝えている福音」という意味とともに、「私がそれによって救われた福音」という意味があります。テモテ第二2:8で「私の福音に言うとおり、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい」と言っているように、パウロは、復活されたイエス・キリストによって生かされているという現実、体験、また証しによって、福音を語り、伝えたのです。福音は、「十字架の福音」であり、「復活の福音」であるとともに、「私の福音」でなければならないのです。

私は引退牧師の会の ZOOM ミーティングをしています。以前一緒に働いたカリフォルニアやハワイの先生がたと顔をあわせて話し合うことができ、励まされています。先生がたはそれぞれ引退なさっても、なお伝道が続けています。それで、ミーティングでは伝道のことが話題になります。COVID のため、どの教会でもインター

ネットでメッセージを配信するようになりました。それをどう活用できるだろうかということも話します。福音がさまざまなメディアを通して広がっていくのは良いことです。しかし、福音の本来の「メディア」は「人」です。福音は、たんなるステートメントではなく、人を変え、生かすものです。福音は、キリストに出会い、キリストに変えられた人から、まだキリストに出会っていない人へと伝えられるものです。そして、そのとき、福音が人を変えるものとなるのです。また、キリストを信じる者たちの間で福音が分かち合われるとき、それが信仰者を強くしていくのです。そのようにして私たちからもうひとりの人へと福音が広がっていくことを心から願っています。

(祈り)

父なる神さま、十字架と復活の福音を感謝します。この福音を「私の福音」として信じる者としてください。福音の力を体験し、その証しを分かちあうことによって福音を伝える私たちとしてください。イエス・キリストのお名前です。

生き返るたましい

コリント第一 15:1-5

23:1 【ダビデの賛歌】主は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。

23:2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。

23:3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。

23:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。

23:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。

23:6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

今年は詩篇 23 篇を「年間聖句」に選びました。詩篇 23 篇からすでに何度かお話ししましたが、きょうは 3 節の「主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます」を取り上げます。

一、たましい

「主は私のたましいを生き返らせ…」の「たましい」は、もとの言葉で「ネフェシュ」と言います。聖書でこの言葉が最初に出てくるのは創世記 1:20 です。生きていたという言葉「ハヤー」と組み合わせて「ネフェシュ・ハヤー」といって、「生き物」と訳されています。「つ

いで神は、『水は生き物の群れが、群がるようになれ。また鳥は地の上、天の大空を飛べ』と仰せられた」とある通りで、同じ言葉は21節、24節でも使われています。創世記1:30には「また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える」とあって、「ネフェシュ・ハヤー」が「いのちの息」と訳されています。このことから、「ネフェシュ」には神に造られた物（creature）、しかも植物以外の命を持つ物（living creature）という意味があることが分かります。神はすべての「生き物」に命をお与えになったお方です。

人間に命をお与えになったのも神です。創世記2:9にこうあります。「その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」どの生き物も神から命を与えられていますが、人間の場合は特別です。もっと密接な神と人と関係の中でその命が与えられています。人の命は、呼吸をし、食べ物を消化し、子孫を増やすといった生物の営みだけではありません。人は、自分の意志を持ち、感情を持ち、知性を持ち、人生の意味を尋ね、目的を見出して生きるものです。人の「ネフェシュ」は、意志や感情、知性が働く場、つまり、「たましい」と訳され、その人の存在や人格を指すのに使われます。

ですから、詩篇23:3の「主は私のたましいを生き返らせ…」というのは、「主は、私に生きる意味と目的を教

え、私を人格として生かしてくださる」ということになります。

詩篇 23 篇は、神が「羊飼ひ」、私たちが「羊」だと言っているのですが、普通、羊飼ひは生まれた羊を育て、世話することはあっても、羊を生み出し、羊に命を与えることはできません。しかし、天の羊飼ひは、羊である人間を造られたお方、人に命を与え、生かしておられるお方です。詩篇 100 篇にこう書かれています。「知れ。主こそ神。主が、私たちが造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。」私たちの羊飼ひは私たちが造ったお方、私たちに命を与えたお方、私たちが生かしておられるお方です。だからこそ、主は私たちのたましいを生き返らせることがおできになるのです。

二、生きる力

この詩篇でダビデが「主は私のたましいを生き返らせ…」と言っているのは、ダビデが「たましいが死ぬ」ほどの体験をしたことを物語っています。ダビデは、イスラエルの初代の王、サウルに認められ、サウルの娘と結婚し、サウルの義理の息子になったのですが、猜疑心の強いサウルから命を狙われました。サウルが戦死したのち、ダビデはイスラエルの第二代の王となりましたが、それまでの間、「もはやこれまで」と覚悟したことが何度もあったでしょう。絶えず命の危険にさらされ、たましいがすりきれるような思いをしました。「たましいの死」を体験したのです。しかし、ダビデはそのつど神に

信頼し、命を救われ、たましいが生かされ、より一層力づけられる体験をしてきました。ダビデがここで言っているのは、そのような体験のことだと思われます。

ダビデのように命の危険にさらされることがなくても、「たましい」がしおれてしまい、生きる意欲を失ってしまうことがあります。災害など、大変なことが起こったときは、かえってたましいをふるいたたせることができるのですが、毎日の生活に不満しか感じられないとき、「たましい」から喜びが消え去って、まるで真綿で締め付けられるように、徐々にたましいが萎えてしまうものです。そんなとき、感動的なドラマや映画を見て、「そうだ、私も頑張ってみよう」と思い直すことがあるでしょう。親しい友だちが訪ねてくれて、楽しい語らいの時を持って、気分が晴れやかになるということもあるでしょう。毎日忙しく過ごしている主婦が、旅行に出て、仕事や家事のことを忘れ、新しいものに触れ、「ああ、生き返った気持ちができる」と感じることもあるでしょう。しかし、そうしたことは、一時的な「リフレッシュメント」で、二、三日のうちには消えてなくなるようなものです。しばらくの間、気を紛らわせるだけで、それが終わると、また砂漠のような生活に戻っていく場合も多いのです。

けれども、主が私たちのたましいを生き返らせてくださるのは、そのような、表面的、一時的なものではありません。それは羊が牧草のたくさんあるところ、きれいな水が豊かにあるところにいるときのような、安らか

で、満ち足りた状態を指しています。詩篇 23:5 に「私の杯は、あふれています」とあるように、主が私たちに備えてくださる食卓では、ほんのちよっぴりしかない入っていない杯をなめるようにして飲むというのではなく、大きな杯にあふれるほどのものを心ゆくまで飲むことができるのです。そこでは、私たちのたましいの渇きは癒やされ、私たちのたましいは、喜びで満たされるのです。

このように「たましいを生き返らせる」ことは人間にできるものではありません。それができるのは、人を「生きたたましい」として造り、私たちを生かしてくださる神だけです。イエスは「わたしは、良い牧者です」とおっしゃり、「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」と言われました（ヨハネ 10:10-11）。私たちのたましいを生き返らせるもの、それは私たち自身でも、私たちをとりまく環境でも、また、人間関係でもありません。神は、そうしたものを用いてくださいますが、私たちのたましいを生き返らせる命そのものは、神が与え、キリストが差し出してくださる命です。そして、この命は、イエス・キリストを信じるとき私たちのものとなります。イエス・キリストに信頼して歩むとき、私たちのたましいは生き返るのです。

三、義の道に

「主は私のたましいを生き返らせ…」という言葉は、「御名のために、私を義の道に導かれます」という部分とつながっています。「たましいを生き返らせ…」というところで使われている「生き返る」という言葉は、神

から離れていた人が神に立ち返るときに使われる言葉です。ルカ 15 章の放蕩息子は実際に死んで生き返ったわけではありませんでしたが、彼が父の家を飛び出して消息が絶えた時、父親にとって、息子は死んだも同然でした。また、息子自身も、神から離れた好き勝手な生活によって、靈的には死んだような状態になっていました。けれども、この息子は、どん底まで落ちたとき、悔い改め、父親のところに帰ってきました。息子を迎え入れた父親は、「そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから」（ルカ 15:23-24）と言って喜びました。このように、たましいが生き返るとは、神のもとに立ち返ることなのです。神から離れ、そこから迷い出ている「義の道」に立ち返ることなのです。ですから、きょうの箇所では、「主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます」と、たましいが「生き返る」と「義の道に導かれる」ことの二つを結びつけているのです。

人の生き方には、三通りあるように思います。一つは「たくましく生きる」です。動物たちはじつに「たくましく」生きています。どの家のバックヤードでも、我が物顔で出沒するリスなどは、じつに「たくましく」生きています。追っ払ってもやってきて、植えたばかりの草花を掘り返します。雪が積もる冬にも、太陽がカンカン照りつける夏でも元気そのものです。

もう一つは「うまく生きる」という生き方です。動物には人間が持っているような知恵はありませんが、それでも、私たちがおどろくようなしかたで、動物たちは自分たちの住処をつくり、子育てをし、身を守ります。カリフォルニアにいたとき、ハミングバードがパテオルームからすぐ、手が届くようなところに巣を作りました。どこからあんな材料を見つけてくるのだろうと思うほど、さまざまな材料で見事な巣を作り上げていきました。しばらくして、卵を二つ生み、それを暖めていましたが、やがて卵が孵りました。親鳥は、せっせと二匹の雛鳥に餌を与えていましたが、そのうち飛び立って、巣をあとにしました。神はそれぞれの生き物に「生きる力」や「生きる知恵」をお与えになり、彼らは「たくましく」また「うまく」生きています。

人間も同じです。失敗しても、そこから這い上がって、またやり直す。そんな「たくましさ」を持った人は、最後には成功した人生を手にするでしょう。また、ずるく、悪賢く生きることはよくありませんが、知恵を働かせ、賢く生きることも、人にとって大切なことです。けれども、人間には、「たくましく」、「うまく」生きるという他に、もうひとつの生き方が求められます。それは動物には無いもので、「より良く生きる」ということです。より正しく生きる、よりきよく生きる、もっと他の人を愛して生きるということは神に立ち返り、神によってたましいを生かされてはじめてできることです。

聖書に「悪者には心の痛みが多い」（詩篇 32:10）とありますが、人は、どんなにたくましく生き、上手に世の中を渡り歩いたとしても、神の前に正しい生き方ができていないときには、平安も喜びもない、どんなにしても満ち足りることのない生涯しか送ることができないのです。けれども、私たちが悔い改めて罪から離れ、神に「立ち返る」とき、神もまた、私たちのたましいを「生き返らせて」くださるのです。

私たちの立ち返るところ、そして、私たちが生かされるところ、それは私たちの羊飼いいエス・キリストです。「あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」（ペテロ第一 2:23）私たちみんなが、この言葉の通りに神に立ち返り、羊飼いいエス・キリストによって、「主は私のたましいは生き返えらせ…義の道に導かれた」という体験を与えられますよう、ここから願います。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、私たちの良き牧者イエス・キリストによって、あなたに立ち返る道を備えてくださいました。私たちのたましいを生き返らせ、あなたの道に歩み、人生を「より良く」生きる者としてください。キリストのお名前です。

わたしはあなたを忘れない イザヤ 49:13-16

49:13 天よ。喜び歌え。地よ。楽しめ。山々よ。喜びの歌声をあげよ。主がご自分の民を慰め、その悩める者をあわれまれるからだ。

49:14 しかし、シオンは言った。「主は私を見捨てた。主は私を忘れた。」と。

49:15 「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。

49:16 見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。あなたの城壁は、いつもわたしの前にある。」

「母の日」おめでとうございます。「母の日」は1907年、アナ・ジャービスさんが、2年前に亡くなった母親の記念礼拝をヴァージニアのグラフトンにある教会で行ったことから始まりまりました。「母の日」には家族そろって教会に行き、こどもたちが母への感謝を書いた手紙を渡すというのが、伝統的な「母の日」の祝い方でした。ところが「母の日」がポピュラーになるにつれて、それが商業化されていきました。アナ・ジャービスさんが、「母の日」の商業化に反対するデモに参加して逮捕されるという事件が起こっています。

「母の日」の創設者ともいえるアナさんの存命中にさえ、「母の日」がすでに商業化していたとしたら、今は、もっとそうでしょう。教会からはじまった祝祭日が世の中に広まるのは良いことではと思いますが、その祝日の本来の意味が忘れられ、薄められ、ゆがめられてしたもの

が教会に戻ってくるとしたら、それはとても残念なことです。教会からはじまったものは、本来の形でお祝いしたいものです。

一、神の約束

聖書では神は「父」と呼ばれます。そして、神の愛というと、私たちは、父の愛を連想します。あの放蕩息子の父のように、立ち返ってきた息子を赦し、受け入れる大きな愛を思い浮かべます。母の愛は、ときには強く、大胆にもなりますが、父の愛とくらべると、細やかな愛です。神は、「父」と呼ばれてはいても、神が母親が持つような愛を持っておられないわけではありません。きょうの箇所では、神が、母親のような愛情をもって、こうっておられます。「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。」

(15節) 神は、母親が子どもを愛するような細やかな愛情をもっておられ、子どもをいつくしむ母親の心をよく知っておられるのです。父の愛だけでなく、母の愛も、神の愛にそのみなもとがあるからです。

最近、日本で、まだ数ヶ月の赤ちゃんや二、三歳の幼児が虐待を受けて死んでいくという痛ましい事件が起こっています。しかも、子どもを虐待しているのが、実の父親、実の母親だということです。そんなことは、かつては考えられないことでした。私の子どもの頃、誰もがみな貧しい生活をし、いつもお腹を空かしていました。それでも、どの親も、自分は十分に食べなくても、子ども

にはたくさん食べさせようと思いました。親が子どもをいじめたり、虐待したりすることは、めったにありませんでした。どの親も、何かあれば子どもをかばったものです。

しかし、「捨て子」はあったようで、そうした話はよく聞きました。親が子どもを育てられなくなって捨てることは今もあります。そんな子どもの命を救い、守るため、ドイツで **Babyklappe** というものが設けられました。自分で育てられなくなった赤ちゃんを預けておく場所です。それをモデルにしたのが、日本の「このとりのゆりかご」（通称「赤ちゃんポスト」）です。全国でただ一箇所、熊本のカトリック系の慈恵病院にあります。

テキサスでは、かつて年間百人もの赤ちゃんが捨てられ、そのうちの何割かの赤ちゃんが亡くなっていました。トイレやゴミ箱で発見されることもあったそうです。そうした赤ちゃんを救うために **Baby Moses Law** というものがつくられました。川に捨てられた赤ちゃんのモーセがエジプトの王女に救われたことから名付けられた法律です。これは、親がどうしても育てられない場合、生後2ヶ月までの赤ちゃんを引き取って育てるという制度です。テキサスから始まって、今はアメリカのほとんどの州に同じようなものができました。

どの親も、子どもを捨てたくて捨てるわけではありません。そうせざるを得ないさまざまな理由があるのだと思います。母親が子どもを捨てるといったことが起こらないように、根本から問題を解決していかなくてはなり

ません。そのためにさまざまな取り組みがなされていますが、捨て子を防ぐことができない悲しい現実があります。子どもは父の愛、母の愛を受けてこそ健全に育ちます。母親から捨てられた子どもや母親の愛を十分に受けられなかった子どもには、大人になっても、心の傷が残ります。低いセルフエスティームしか持てない、健全な物の考え方ができない、人との関わり方が分からないなどといったことが起こります。希望や確信を持って人生を送ることができなくなるのです。

けれども、神は言われます。「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。」この言葉は、「主は私を見捨てた」と言って、嘆いている人たちや「主は私を忘れた」と言って、不満を訴えている人たちへの答えです。神は「わたしは決してあなたを捨てない、忘れない」と答えておられるのです。

さまざまな理由で、子どもころ母親の愛を十分に受けられなかったとしても、この神の愛を知り、信じる者は、父の愛、母の愛にまさる愛、それらの愛のみなもとである神の愛によって、足らなかったものを補ってあまりあるものを受けることができます。心の傷が癒やされ、健全な生活を取り戻すことができます。神を信じる者、神に頼る者は、「私は決して見捨てられない、忘れられることはない」との確信を持つことができます。詩篇 27:10 にあるように、「私の父、私の母が、私を見捨て

るときは、主が私を取り上げてくださる。」とすることができのです。

二、イエスによる実現

この神の愛は、イエス・キリストによって、よりいっそう確かなものとなりました。イエスは、「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません」（ヨハネ 14:18）と約束されました。まるで、母親が四六時中子どもから目を離さず、どんなことがあっても子どもを見放さないように、イエス・キリストは信じる者と一緒にいてくださるのです。

「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません」との約束は、第一に、復活によって実現しました。イエスが「わたしはあなたを捨てない」と言われたのは、最後の晩餐を終え、十字架を前にしてのことでした。イエスは世を去ろうとしておられ、この後十数時間のうちに、主は十字架の上で息絶えられたのです。しかし、いのちの主が死んだままであるはずがありません。主は予告されたとおり、三日の後、復活されました。イエスが十字架にかかられたとき、弟子たちは主を見捨てましたが、主は決して弟子たちをお見捨てにはなりませんでした。復活して、そのお言葉どおり、弟子たちのところに戻ってこられました。

第二は、聖霊によってです。復活されたイエスは、四十日ののち、天にお帰りになりましたが、天から、もうひとりの助け主、聖霊を与えてくださいました。主イエスが天に帰られるかわりに、天から聖霊が来られたので

す。この聖霊は、信じる者の内に住んでくださり、キリストは聖霊によってわたしたちと共にいてくださるのです。聖書で神は「父」、主イエスは「息子」と呼ばれ、どちらも男性のイメージがあるのですが、聖霊には「母親」のイメージがあります。信じる者は神の子どもとされるのですが、信じる者を神の子どもとして生んでくださるのは聖霊です。聖霊は新しく生まれた神の子どもたちを育て、導き、養い、教え、慰めてくださるお方です。エペソ 4:30 に「神の聖霊を悲しませてはいけません」という言葉があります。私たちが罪を犯すとき、聖霊がそれを悲しまれるというのですが、それは、子どもが良いことをしたときに喜び、悪いことをしたときにそれを悲しむ母親のような気持ちを表しています。「たとい母親がその子を忘れるようなことがあっても、わたしは忘れない。見放さない」と言われた神の愛や、イエスが「わたしはあなたを捨てない」と言われたイエスの恵みを、聖霊は、私たちに体験させてくださるのです。

第三に、主の言葉は、主の再臨によって実現します。主イエスが天に帰られた後も、聖霊が共にいてくださいますから、わたしたちは決して地上にとり残されているわけではありません。けれども、やがて、イエスが、もういちど地上に来られ、私たちが天にあげられるとき、私たちは、天にイエスが備えてくださった場所に迎えられ、イエスと共に住むようになるのです。主とともに、永遠にです。これは、今、地上では想像もできないような次元のことですが、そのことはかならず実現するので

す。

「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。」
この言葉をもとに Ludie Day Pickett さんがひとつの詩を書きました。それには "No, Never Alone" という題がつけられ、賛美となって多くの人に歌われるようになりました。日本語では「主は捨てたまわじ」というタイトルで新聖歌 205 番に収められています。英語の歌詞の 4 節目を、そのまま日本語にするとこうなります。

主はあの丘でわたしのために死なれた
わたしのためその脇腹を刺し通された
わたしのためその泉を開かれた
それは真っ赤な、きよめの血潮
わたしのため、主は栄光のうちに待っておられる
その王座に着いて
主はわたしを捨てないと約束された
けっしてわたしをひとりにしないと
ひとりにしない ひとりにしない
主はわたしを捨てないと約束された
決してわたしをひとりにしないと

ここにはイエスが、私たちがひとりにしないため、また、私たちが天に受け入れるため、十字架でそのいのち投げ出してくださったことが歌われています。きょうの箇所 16 節に、「見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ」とありましたが、イエスの両手にある十字架の釘跡は、まさに私たちがそこに刻まれているところだと思います。イエスの受けた傷は、私たちの罪のためのもの

で、私たちはその傷によって罪を赦され、たましいが癒やされます。イエスは私たちを、赦された者、癒やされた者として、ご自分の手のひらに刻んでいくさるのです。私たちが天のふるさとに帰るとき、主はその両手をひろげて、私たちを迎えてくださるでしょう。そのとき、きっと、私たちは手のひらの傷跡を見ることでしょう。父なる神と御子イエスは言われます。「わたしはあなたを忘れない。…わたしは手のひらにあなたを刻んだ。…わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしない」と約束しておられます。“No, never alone!”「あなたをひとりにはしない。」この力強い言葉に感謝し、信頼しましょう。

私たちは、きょうの「母の日礼拝」で、父なる神の大きな愛とイエスの尊い愛、そして、聖霊の計り知れない愛を学びました。父、御子、聖霊の神の愛こそ、母の愛のみなもとです。すべての愛を根源です。この愛を受け、この愛によって神と人とを愛する人生を歩みたいと思います。

(祈り)

父なる神さま、あなたは私たちを母の胎内で形造り、この世に生まれさせてくださり、母の愛によって育ててくださいました。母にその愛を与えてくださったのは、あなたです。子どもを導き育てることで悩んでいる母親が大勢います。また、母親の愛を十分に受けることができなかつたため心に傷を持っている人も大勢います。誰もあなたの愛を受けることなく、他を愛することはでき

ません。どうぞ、私たちをあなたの愛で満たし、母が子を愛し、子が母を愛し、私たちが互いに愛し合うことができるようにしてください。主イエスのお名前です。

最後の勝利 コリント第一 15:51-58

15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

15:53 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。

15:54 しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」とするされている、みことばが実現します。

15:55 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」

15:56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。

15:57 しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

15:58 ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。

きょうは、イエスの復活によって与えられる人生の勝利についてお話しします。きょうの箇所には、「しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました」（57節）という力強い「勝利宣言」があります。この勝利はイエスの復活から来るのです。

一、「復活」のない人生

しかし、私たちは「復活」を知りませんでした。仏教

の影響によって「無常」という考えが心の奥深くに刻まれるようになりました。「いろは歌」には仏教の「無常」が歌われています。

色は匂えど 散りぬるを
我が世誰ぞ 常ならむ
有為の奥山 今日越えて
浅き夢見じ 酔いもせず

現代語では、「花が咲いても散ってしまうように、この世に常に変わらない人は誰もいない。迷いの多い人生という山を今日ものり越えて、一時の栄華のような儂い夢に酔わずに生きていこう」となりました。「我が世誰ぞ常ならむ」（この世に常に変わらない人は誰もいない）というところに「無常」という言葉が出てきます。

こうした無常観は鎌倉時代の「平家物語」の冒頭にも書かれています。

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす
奢れる人も久しからず ただ春の夜の夢のごとし
猛き者もついには滅びぬ ひとえに風の前の塵に同じ

ここには「諸行無常」（この世の全てが常に流動変化し、一瞬と言えども同じ状態ではない）という仏教用語が使われています。「寺から聞こえてくる鐘の音には〈無常〉の響きがある」というのですが、たしかに、鐘の音は、最初は「ゴーン」と勢いよく鳴っても、その音は徐々に細くなり、ついに消えていきます。世の中でどんなに権力を誇ろうとも、やがては衰えていきます。物

事にいつまでも続くもの、永遠になくならないものはない、常なるものは無い、つまり〈無常〉を、鐘の音は教えているのです。

仏教では、死は避けられないもの、誰も逆らうことのできないものとされていますので、死を克服しようなどどジタバタしてはいけないと言うのです。死を恐れるのは、この世に執着があるからで、そうした執着を断ち切り、死という現実を素直に受け入れれば良いということになります。それが仏教で言う「悟り」なのでしょう。

では、西洋ではどうでしょうか。聖書にもその名が出てくるエピクロスというギリシャの哲学者はこう言いました。「われわれが存するかぎり、死は現に存せず、死が現に存するときには、もはやわれわれは存しない。…ゆえに、知者は生のなくなるのを恐れない。…あたかも、食事に、いたずらにただ、量の多いのを選ばず、口に入れて最も快いものを選ぶように、知者は、時間についても、最も長いことを楽しむのではなく、最も快い時間を楽しむのである。」これは、霊はからだと別に存在するのではなく、からだの働きのひとつだという考えに基づいています。ちょうど、ろうそくが燃えてほのおが灯るように、蠟というからだは燃えて、ほのおという「霊」が存在する。だから、蠟が燃え尽きれば、ほのおも消えるように、からだは死ねば「霊」もなくなると考えるのです。「私」というものは、脳の中で作られたものであって、脳が死ねば「私」も消えてなくなる。だか

ら、死がやって来るとき、そこに「私」はいないのだから、人は死を恐れることはないというのです。

しかし、これは詭弁です。実際は違います。人間のからだは60兆もの細胞で出来上がっていますが、毎日その2パーセント、1兆2千億の細胞が新しく造られ、古くなったものは分解されて体外に排泄されています。脳の140億の蛋白質も120日で新しいものに入れ替わります。なのに、過去の記憶は受け継がれ、「私」は「私」のままです。私たちのからだの中で毎日死と命が働いているのに、「私」は存在し続けています。これは、人の霊がからだとは別に存在していることを教えています。人はからだを持った霊です。死とは、霊とからだが分離し、からだが土に返り、霊が神のもとに帰ることです（伝道者12:7）。人は、いつか自分の死を体験するのです。人のたましいはそのことを知っています。だから、人は死を恐れるのです。

二、「復活」の事実

仏教の「無常」は人生の観察から生まれ、ギリシャ哲学は人間の論理から生まれました。そして、そのどちらも、それが正しいことを証明するものを持っていません。しかし、聖書が教える「復活」は、イエス・キリストがよみがえられたという事実に基づいています。

「復活」は、人間が作り出した理論や物語ではありません。弟子たちは、最初誰もイエスの復活を信じようとはしませんでした。そんな弟子たちが、復活を信じ、命がけで復活の証人になったのはなぜでしょう。復活された

イエスに出会ったからです。「人は死んで終わりではない。やがて、復活する」と信じることができるのは、イエス・キリストが復活されたという事実があるからです。どんなに深遠な哲学も、宗教も、事実に基づき、事実によって証明されなければ意味がありません。それでパウロはこう言いました。「そして、もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。そうだったら、キリストにあつて眠つた者たちは、滅んでしまったのです。もし、私たちがこの世にあつてキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。しかし、今やキリストは、眠つた者の初穂として死者の中からよみがえられました。」(17-20節)「復活」の教えが正しいことは、復活の事実によって証明されているのです。

ここでパウロが、「今やキリストは、眠つた者の初穂として死者の中からよみがえられました」と言っていますが、「初穂」とは、穀物畑で最初に実る穂のことです。初穂が良く実っていれば、それ続く穂も良いものであることが分かります。初穂は、全体の収穫が豊かであることを保証するものです。そのように、イエスの復活は、イエスを信じる者たちの復活を保証するものなのです。

きょうの箇所は、イエス・キリストを信じた人々は、死んだままで終わらず、復活すると教えています。「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私た

ちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。」（51-53 節）聖書は、そのとき、キリストにある者は完全な栄光のからだに復活すると教えています。ヨハネ第一 3:2 に「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです」とありますから、私たちも、復活されたイエスと同じようになるのです。

私たちは、このような復活を信じています。この希望に生きています。しかし、それは根拠のない信仰、実現する見込みのない希望ではありません。それは確かなこと、必ず起こることです。なぜなら、復活はすでに起こったからです。イエスはすでに死に打ち勝ち、栄光のからだによみがえられました。イエスを信じる者たちも、その後につき、同じように復活するのです。

三、「復活」を信じる人生

私たちは「復活」を知らないときやそれを信じなかったときには、死を恐れるか、「無常」を嘆くかしかありませんでした。現代の多くの人々は、エピクロスが言ったような唯物的な考えに染まっていて、死の現実を考えな

いようにし、その恐れをごまかして生きています。どうせ死ぬのなら、人生を思い通りに、おもしろおかしく生きていけばよいのだと考えるようになりました。コリント第一 15:32 に「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか」という言葉がありますが、これはイザヤ 22:13 からの引用で、神を信じない人生の結末を描いています。

しかし、復活を信じる人の人生は違います。復活を信じる者は、死の恐怖から解放されます。死は罪の結果ですから、イエスを信じて罪を赦された者は、罪の刑罰から救われ、死後の裁きを恐れることが無くなったからです。この世でどんなに成功を収め、思い通りのことができたとしても、どの人にも「死んでさばきを受ける」ことが定められています。そのときに死の問題が解決されていなければ、最後の勝利を得ることができないのです。最後の勝利とは死への勝利であり、それは復活されたイエス・キリストによってのみ与えられるものです。

さらに、復活を信じる者は、人生にどんな嵐が吹いても、落ち着いてそれに対処できるようになります。思いわずらいや不安、迷いや混乱から救われて、まっすぐに、確かな日々を送ることができるようになります。どんな小さなことにでも意味を見い出して、そこから満足を得ることができるようになります。58 節に、「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知ってい

るのですから」とある通りです。

私は、この通りのことを体験しました。私は子どものころ、あいついで肉親を亡くし、自分も大きな病気を患いました。「死の恐怖につながれていた」（ヘブル2:15）というのは本当でした。しかし、イエスを信じたとき、そこから解放されました。牧師になって、多くの人がイエスの復活に与るのを見てきました。イエスの復活そのものが大きな奇蹟ですが、日本人が、日本でも、アメリカでも、イエスの復活を信じて、新しい人生を生きるというのは、イエスの復活と同じくらいの奇蹟です。私は、そのような人々を何百人と見てきました。

今、ひとりの人のことを思い起こしています。日本でこのことですが、病気がちで、礼拝を休むことの多い人がいました。その人の欠席が続いたときには訪問して、そこで小さな礼拝をしていました。その人の年老いた両親もともに福音に耳を傾けてくれました。父親はすでにイエスを信じる決心ができていましたが、急に具合が悪くなり入院しました。彼はバプテスマを受けたいと希望していましたので、私は病室で、彼の信仰を確かめ、「バプテスマを授けますが、いいですか」と訊きました。声を出す力はありませんでしたので、うなずいて「はい」と答えました。それまでとても苦しそうだった表情が、バプテスマを受けたあと、ほんとうに安らかになり、ほほえみさえ浮かべていました。神が彼に平安を与えてくださったことが分かりました。それからほんの数日で、彼は亡くなりましたが、私たちは、彼が主のもとに召さ

れたことを確信することができました。彼は人生の最後の勝利を手にしたのです。

「死にさえも勝利する。」そんなことは、人間の力でできることではありません。それはよみがえって死に勝利されたイエスだけができることです。このイエスの勝利によって、私たちも人生の勝利者となることができます。

(祈り)

父なる神さま、あなたは、イエスの復活によって、私たちに死に打ち勝つ勝利を与えてくださいました。「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」

(ローマ 6:23) このいのちの贈り物を、素直な信仰で受け取り、復活の主を信じる信仰によって人生の勝利を手にすることができるよう助けてください。イエス・キリストのお名前です。



Penguin Club
www.penguinclub.net